

言語教育と思想形成

——日本とアメリカの場合——

佐藤啓子

序

これからの時代にあつて真に生きぬいていくためにもっとも大切なことは、まず主体的に物事を考え、自らの属する社会に積極的に参加し、はっきりと発言し、仲間づくりをすすめることにある。すじみちをたてて発言していく場合、二つの訓練が必要と考へられる。まず第一は、日常生活のあらゆる場所で思考することに慣れ、真なるものをみぬく眼を養うことであり、第二は、大衆の面前で臆することなく、自己の考えを正しく伝達する方法を獲得することである。

もしこの二つの訓練が正しく身につけていれば、たとえ価値観が激しく揺れ動き、ややもすると情報の渦におし流されるようなことになつても、すぐまた新しく自己の主体性を回復し、自らの

思想を構築しなおすことが可能となるであろう。

それでは、この二つの訓練はいかなる方法によつて、もっとも効果的に行われ得るであろうか。

その一つの方法として、パブリック・スピーキングに基づく言語教育方法を提案したい。

本論

一 日本の言語教育と思想形成

(一) 言語行為と思想形成

言語活動と思想形成の関連性は、非常に深いものがある。短大の学生に語文演習という形で大衆の面前でいかに自らの考へていふことを話すかの演習を実施してみても、ますますその感を深めた。語文演習とは日本語と限定せず、話すことと書くことの両面から

言葉や文章そのものをいろいろの形で学び身につけるためのゼミナール形式の授業である。確かに学生達は最初はとまどい失態し恥かしい思いをした。中にはショックで泣き出すものもいた。しかし発表し終った時、彼女等は何を感じたか？

それはまず自分の考えていたことをはっきりと伝達しえたという大きな満足感と、人の前に立つことは、考えていたよりもはるかに簡単なことであるという実感であった。さらに大切なことは、学生たちが人との交わりを開くには、問いかげはじまりであり、それが連帯感の基礎となり、熱意をもって聞いてくれる仲間づくりに役立つのだと気づいたことである。

この経験から、語文演習という授業は主体的に物事を考える契機となり、その考えるところを自信をもって述べるためのテクニクを身につけるのに適しているといえる。これまでの日本の言語教育に欠けていたのは、自分の考えをまとめ、適切に表現しそれを仲間の前ではっきりと言葉に出して呼びかける部分である。この欠落している部分を補うものとして語文演習という形で米國で行われているパブリック・スピーキングに相当する内容を日本の言語教育に導入することが有効であると思った。

何故そのような方向づけが正当であると考えられるかを以下に述べてみたいと思う。

私は一九六七年より一年半、アメリカに滞在し、様々の場所で日本人の発言の乏しさ貧しさについて考えさせられた。現象とし

ては英語が話せないということではあるが、その根本的な問題は、実は日本語も英語も含めた上でのこれまでの言語教育のあり方に何か欠けている部分があるために起きていると感じた。すなわち英語教育でも日本語教育でもいろいろの問題は同じ根源から発生していると考えられ、どちらの言語の場合でも、その教育方法の再検討が、同じような角度からなされるべきであると考えるからである。何故ならば、真の外国語教育者はまず秀れた母國語の教育者であらねばならないからである。同時にそのことは実際に学ぶ側でも、外国語に情熱を持つものは、母國語にも同様である傾向が強いことからいえるよう。

例えば「自己自身について」というテーマで英文と日本文を同じ学生達に書かせて、両者を比較検討してみると、両者の評価は極めて似かよっていた。そこで英語と日本語をひっくりかえした上で、日本人の発表能力における問題性を考察してみよう。

(二) 日本の英語教育

ここでは話を簡単にするために、日本人が英語を話せないのは何故かという点から、話をすすめてみようと思う。実際は英語を十分に理解出来、作文能力を十分に持っているも、日本人は國際的な舞台に立って自信をもってスピーチや議論が出来ない場合が多い。というのは決して能力において劣るのではなく、発言することの訓練不足と、質問したりその場ですぐ仲間として加わろうとする意欲を積極的によしとしない価値観の相違であると考えら

れる。しかし民主的社會を推進していくためには、持っている考
えを適切に発言する能力を優先させることである。話すことはそ
のまま考えることを誘発し、思考をより自覚あるものとするため
の大切な行為なのである。

ところが、日本の英語教育は人の前で話したり問いかけたりす
ることを欠落しており、英語も総合的な人間教育であることを考
慮していない。それは日本における英語教育が他のあらゆる現象
と同じく、維新後、にわかに取り入れられたため、すでにその出
発点において幾多の問題を含んでいたといえる。少数の実際に英
語の生活にふれた人が、英語教育における生の人間のふれあい
による言語教育の必要性を強調してはいたが教師がいなかった。

英語教育においては書物の輸入読解が先決の当時の事情から、
発音や言葉の生きている部分を見おとししまったことによる言
語教育としての矛盾点が今日まで尾をひいている。勿論、明治以
来、手段化されすぎ言葉本来の活動が見失われている英語教育に
何度かにわたって数々の改革案が出された。殊に、実際に米國に
留学し、英語の生の魅力にとりつかれた神田乃武の英語教育法の
改良案は、今日でも有効である。例えば外国語を母國語に翻訳す
ることは最小限にする、またテキストについてたえず会話をする
ことなどの点は再考する意義をもつ。(英語事始 一九七六)

英語教育に関してその後続々と改良案が出されながら、なか
か実施されなかつた最大の理由は、日本においてはスピーチとい

う伝統、すなわち、人々と言葉を駆使して交わりをもとめ、仲間
づくりをしていくという伝統がなかつたことである。

「演説とは英語にて『スピーチ』と言ひ、大勢の人を会して説
を述べ、席上にて我思ふ所を人に伝ふるの法なり。我國には古より
其法あるを聞かず、寺院の説法などは先づ此類なる可し。」

(福沢諭吉 一八七二)

この演説の輕視が日本の英語教育を理解すること、解釈するこ
と、翻訳することを中心にし、やさしい言葉であつても、これを
十分に駆使してまずは意志の疎通をはかるといふ言語のもつとも
本質的な機能を見落したといえる。

二 言語の二つの側面

——言語能力と言語運用——

何と言つても言語の本質は話し言葉の中にある。すなわち言語
は元來音声であり、この人間特有の行動が豊かな創造性の出発点
になるという事実注目する必要がある。言葉の生き生きとし
たやりのの中に形成されてゆく単なる自己満足でない、客観性
をもつた思想は、言語活動の結果として考えられねばならない。

外国に行つてその國の言葉を話すことは、まさにこの生き生き
とした創造的な言語活動を自己のものとするという生の経験の喜
びをうることなのである。つまり行為に裏づけられて始めて、言
葉は本來的な作用をもち得るといふことであらう。言い換えれば、
言語の重要な機能の一つは、言語外の経験を言語的に表現するこ

とであつて、このような機能によつて言語は、経験に構造を与へるのである。(Bühler 一九三四 および Halliday 一九七〇)
そしてこのように経験が、深く思想と結びつていくことから、言語教育が人間教育として、場面とか文化とかと言つたものと密接に関連したものであることが明らかになる。例えば英語のスピーキングの学習においては日常生活の必然的にくりかえされる場面の中でおのずから身につけてしまふ部分が中核であり、文法や難解な単語が駆使されるようになるのは、その中心的部分が相当程度学習されてから後のことであると考えることができる。この言葉の生の部分の裏付け、必然性が真の思想形成、地についた創造性のために大切なのではないだろうか。すべての能力は勿論、その必然的な場や、必要性により伸びるものであるが、言語能力こそまさにもっともそれに影響を受けていると言える。

もちろん幼児が自国語を習得する過程と大人が外国語(いわゆる a second language)を学習する過程とは、根本的に異なるという有力な意見があり、このことが言語学者の間で長い間、論議されてきたことは事実である。そして、ここ三十年位、幼児が母国語を身につけていく過程と大人が外国語を修得する場合は違つてゐるという意見が強い。しかしここで強調したいのは、これまでこれら二つの学習過程の相違点ばかりが指摘されてむしろ問題の本質を見失つてゐるのではないかという点である。それにこのような議論により、果して言語教育に関する理論が実際どれほ

ど改善されたと言えるだろうか。

ここではむしろこれら二つの学習過程の類似点に注目したい。まず言語のはたらきを、Chomsky (一九六五)は competence (言語能力)と performance (言語運用)に区別した。competence というのはある言語の理想的な話し手の母国語を自由におやつることが出来る言語能力である。一方 performance というのは、具体的な場における言語の現実的使用のことである。この区別はもちろん、母国語について言われることであるが、これを第二番目の言語の学習、すなわち大人が母国語の他にもう一つの言語を学習する場合にあてはめて考えてみると、外国語の学習もやはり二つの側面から成り立っていると考えることが出来る。すなわち、一つは英語について学習者がもっている能力、文法の知識とか記憶している単語などである。そしてもう一つの側面は、学習者がこれらの能力を活用して実際に英語をつかうことである。

この二つの側面の相互作用が外国語の学習の場合には、特に重要である。もちろん母国語の習得においても言語能力と言語運用の関連性は重要であるが、それは言わば母国語の文化の中で極めて自然な事柄である。別な言い方をすれば、母国語は無意識のうち努力なしにある段階を経て習得される。しかしある外国語をその言語が話されていない国で学ぶ場合、学習はほとんど全て人工的に行なわれる。そこで学習者が相当努力をし、または教師が指導をして学習者がそれまで蓄積してきた言語能力に基づいて、

意識的に言語運用を行い、言語能力をさらに増進していくという相互作用が学習の本筋であるといえよう。同時にその過程で、徐々に思想形成の学習もなされ得る可能性を考える必要がある。その際、パブリック・スピーキングの授業は非常に有効な動機づけとなるだろう。

三 行爲・場・文化と結びついた英語教育

英語教育においては、できるだけ、言語行爲が、言葉の習得と結びついた形で、導入されなければならない。英語教育を、日常性の中でとらえなすこと、その環境づくりから考えていかなければならない。例えばはじめて英語にふれる中学校一年生から、英語の時間は一切、英語以外は使わない授業を徹底的に実施するとか、思い切った改革が必要である。つまり言語が行爲と結びついたとき、言葉を駆使する楽しさを感じるためには、英語そのものにどっぷりとつかることである。つまり英語で話をすることは、英語で考えるということなのである。そのためには、英語教師は英語のみで教える方向を目ざさなければならぬ。そして英語教師に対する海外研修を制度化し、生活の中で身につく言語行爲を経験させることが有効である。さらに理想的には英国のいくつかの大学の外国語専攻の学生にみられるように、日本でもすでに提案されているが、学生の海外研修を英語教師養成のプログラムに組み入れることが急がれる。

英語の授業を英語のみで行う場合、英語が今や英米人だけのもの

ではなく、国際語である事実をかんがみ、いわゆる Japanese English で結構なのである。まず最初はほとんど機械的に出てくるあいさつやきまり文句を身につけ、徐々に抽象性を帯びた思考を導入していくのがやはり適当であろう。例えば「Good morning」は「おはよう」なのだと教えるよりも毎朝そうあいさつした方が、言語として身につけるには、より効果的な方法なのである。すなわち場面（たとえ異文化における人工的場面であっても）と結びついたスピーキングに重点をおいた英語教育の重要性、有効性をもう一度考え直すべきである。このことのためにもテキストは、より厳しく、慎重に選択されなければならない。テキストとして平均的な *Reading Series* が充分、理解出来ないジョイスやフォークナーのような文学者の作品を使うのは、もっとも間違っている。

言語活動が日常性と結びついていることがその生の部分であることを考えると、むしろテキストとしては発言行爲とまったく結びついているもの、発言行爲を誘発しやすいもの、つまり子供向けのもの、内容をすでに熟知しているもの（例えば日本のことについて書いてあるもの）、新聞の各欄のトピックスやスポーツ記事、歌、手紙、詩、劇など、身近なものがより効果的である。抽象的、理論的な世界は幼児の言語の発達段階に照らしてみても、と後から身につけていくので、それから後でも遅くない。

このことは一般教養の英語を短大で教えた時に学生達の示した

反応によって確信を持つようになった。二年間、試みにいろいろのテキストを使用してみた。その折、もともと反応の強かったものは、身近に思考を誘発するような、日本人の生活について書かれたエッセイや幼児教育専攻の学生達に教えたパールバックの“The child who never grew”などであり、やはり学生のその時の関心と一致した思想を持つ世界のものが、数年を経た後でも、彼女達の心にやきついていることがはっきりした。このことは言語教育は思想形成と深く関わりを持ち、生々しく生きついでいる部分を大切にすべきであることを示唆している。

四 パブリック・スピーキングの導入

—— 語文演習 ——

私がアメリカで参加していたニューヨーク州立大学での外国人のための英語のコースは様々の国籍を持つ、英語をスムーズに話せない留学生たちの集りであった。そこではまさしくさしせまって英語を身につけなくてはならないきびしい局面にたたざれているが故にみのある授業が行われていた。特にテキストや教授法はもともと工夫されていた。例えば、スパーマーケット、病院、学校、駅などで録音してきた様々の人々の実際に話している会話を聞かせて、その内容をあてさせたり、俗語や現代語を説明したり、身近に起った類似の経験、出来事を発表させたりした。また様々の留学生の書いた自国についての小論や国柄を反映するような問題をとらえて書かれた風俗習慣、国民性、生活状態、社

会背景、歴史などについて討論させたりした。

彼等の背後に授業の成果を早急に役立たせねばならない切羽つまった限界状況があったとはいえ、先週には皆の前で発表出来なかったものが、今日はどうとうとしゃべるといった激変ぶりを度見たので、人間の発表能力がまさに訓練次第であるとの感を強めた。

そこで日本に帰ってからこの方法を応用してみるつもりで、前述の語文演習の時間に、学生に二段階でスピーチの訓練をしてみた。まず第一回目のスピーチは約三分間位で、題の設定を自由にし、一人の発表者に五人の批判者をランダムにあてた。さらに事前に皆の前で話す訓練の必要性や日本語の特異性、テーマの選び方、その起承転結、ジェスチャーの導入、ユーモアの盛り込み方を説明し、聴いている側の心得としては必ず質問や感想を云う義務のあることを力説しておいた。

第二回目のスピーチでテーマを選ばせてみると、明らかに初回と違った題目に移行しているのが明らかとなった。(別表)

スピーチのテーマの選択にあたってその内容を検討すると、第一回目のスピーチの内容にある程度の思想性があると思われる一群の学生は、第二回目には一層その内容が豊かになったと思われる。しかし、人の前で発表するために、まず手近な日常生活に密着した問題をひろって、てっとり早い話題の設定をした一群の学生の第二回目のスピーチの内容は、相当に変化した。すなわち、

Ⅰ群でも第二回目のスピーチにはより視野の広さを感じさせ、聴衆に何かを問いかけるようなテーマが選ばれている。つまり第一回目的ものがつぎの段階への基礎的なテーマの設定の源泉になっていることが明らかである。

自分一人で書くことや読むことでは養われにくい、いわゆる思想の形成が、人の前で自己の思ったことを発表するというややジョッキングな出来事（日本人が今まで、出る釘は打たれるの言葉通り、人の前で話をする）を、いさぎよしとせず、避けてきたが故に（）を通じて訓練される感じがられた。

古くは聖書にもみられるが、最近つぎのような言葉に接し、まさに我が意を得ることができた。

別表

Ⅱ 群		Ⅰ 群					テーマの分類	寸評
思想を 表明するもの	回想的なもの	体 験 談	身近なもの を観察して	日常生活の 中で感じたこと				
						第一回スピーチ		
1 芸術と私 2 未来への遺産をみて 3 私の夢について 4 にわたりのジョンナサン	1 高校時代の先生 2 私の生れ育ったところ	1 尾瀬に遊んで 2 太田に遊んで 3 アルバイトについて 4 キャンプへ行っしたこと 5 森林公園について	1 野鳥 2 祖父 3 我が家の猫 4 姪のかおりちゃん 5 今日このごろの私	1 カレライスの話 2 てんぶらの話 3 寮生活 4 楽しみは歌				
						第二回スピーチ		
1 自己自身について 2 時間の使い方について 3 友人について 4 友人について 5 教養とは何か			1 集団の中の自分について 2 祖父 3 現代の若者について 4 暴走族 5 男性像 6 女性について	1 季節感 2 ファッションについて 3 大学生活について 4 趣味について				
問いかけ中心 人に何かを残す		しみじみと話せる 感情がこもる 人の心をなごませる	視野の広さを感じられる	内容が乏しい 余りに一般的すぎる				

「ことばは、人間の行動である。一人の人間が、生きていく中で実践する行動として、ことばは存在する。ことばは生行動である。(中略)生行動としてのことばの中に、本来思考はゆく、人間がものを考えるのは、生きてゆく中で実践行動をしていく過程においてなのである。」

(勇 康雄 一九七五)

また外国における言語教育について鋭い考え方の一例として以下の文章が掲げられる。

「つまりは、言語活動の鍛練は自己の解放の鍛練でもあること、表現技法への志向は言語の危機が叫ばれている現代への一つの解答でもあることを、教える側も学んだ側も会得するのだ。」

(戸村幸一 一九七六)

日本人が今日まで表現力に乏しい原因は、まず自由に生の行動を自らのものとせずある型にはまった生き方に固執してきたことにある。自由な生の行動の豊かさこそ、言語を生み出し、思想を形成し、表現力をつちかかっていく。日常性の中における無表情や無言がしらずしらずのうちに感じる心の広さを失われ、それが感じる心の内容を、たくみに表現することを妨げてきたのである。この表現力の欠如は、だんだんには求める心——意欲や、自己を認識する力——の欠乏につながり、ことばを生きたものとして日常のものとすることに慣れさせなかった。そのことは他在との連帯感を生まず、人間関係にあっては求めてまでは結びつかない消極性につながるものとなってきている。人間関係構築の基本的な

型が、論理的、思想的な結びつきによって育っていかなかったのも、ことばの生の部分を重要視しなかったからではないだろうか。スピーキングを魅力あるものにするのは、あくまでも単なる技術追求だけではなされずやはり心のあり方、人間味、人格へとつながってゆくことである。

パブリック・スピーキングを実際に短木の授業に導入してみても、自己意識の形成時に、他人の前で自己をさらけ出さずにいられない立場に学生達を追い込むことは、いかに大きな経験になるかを感じた。その経験こそ、やがては主体性の確立につながり、やがては仲間づくりへと踏み出していく一歩となっていく。

言語教育の最終目的はあくまでも、人間形成におかれるが、この語文演習というゼミナルこそ人間をつくるもっとも大切な思想形成に効果があることを示している。

結 論

民主的社會においては、あらゆる場における主義主張を持っていることと、それをはっきりと表現し人に伝えるという能力は同質の価値をもっている。

アメリカのパブリック・スピーキングは、公衆の面前で自己の主張を述べる方法の訓練として教育されている。パブリック・スピーキングは主にアメリカ的に実用性を強調し、話し手、スピーチ、および聴き手を三要素と考え情報意見を伝えると共にそれら

を聴き手に受け入れさせ、説得することをスピーチの目的と考えている。この限りでは、パブリック・スピーキングは単なる技術訓練であるが、その訓練過程で、論旨の構成と同時に、議論の内容への人格的影響が強調される点が重要であると思われる。論旨が明確であり説得的でないまでも少くとも第三者に理解され、受け入れられるためには、議論の基礎が何でありそれをどのような論法で、ある主張を生んで行くかを話し手自身が判っていないければならない。この条件をみたすスピーチを作り上げる経験は、スピーチが単なる思いつきの羅列ではないことを明確に認識させるものである。さらにその上で第三者の前で実際に、スピーチを行って、その反響に直接ふれることにより、より確実な形で思想の形成がなされていく。スピーチの意義はまさにこのことにあり真のスピーチは単なる小手先の話術よりも、話し手の知識、経験、予備検討が反映され、人格的な内容がもつともあらわになることである。その意味で、よき話し手は、よき人間であらねばならぬ。

実際に語文演習という形で、いわゆるアメリカのパブリック・スピーキングの方法を日本に導入し、日本語の基本的な話し方から、英語のスピーチへもっていく訓練、いわゆるスピーキングの訓練を実施してみて、つくづく言語教育は人間そのものを育てるものであることを痛感した。第一回目のスピーチの実施前と実施後の学生の人格に少なからぬ落ち着きや、自信が感じられたのは、

まさに自己自身をさらけ出し、投げ出した言語行為のあとに身についた効果であると思う。このパブリック・スピーキングの時間こそ主体性を育てるものであり、ことばの実態としてのジュエスチャー、動作、人間関係をもっと強く要求しているものである。これからの時代に生きぬく我々にとって、主体性の確立が急務であり、仲間づくりが必須であるとすれば、まさにこの語文演習というセミナールは、その言語行為の段階的過程から、徐々に思想形成へと発展していき、人間関係を聞き、やがては仲間づくりへと発達していくことに寄与するものであり、この情報社会を生きぬいて、自己の生き方を選んでいくために、もっともよきわしい方向に一致するものと思われる。

参考文献

- Bühler, Karl, 1934, *Sprachtheorie*.
Chomsky, Noam, 1965, *Aspects of the Theory of Syntax*.
Halliday, M. A. K., 1970, *Language Structure and Language Function*, in John Lyons (ed), *New Horizons in Linguistics*.
勇 康雄 一九七五 人間教育としての「英語教育」を 英語教育 vol. XXIII, No. 12.
戸村幸一 一九七六 海外の言語学 言語 vol. 5, No. 2.
福沢諭吉 一八七二 学問のすすめ 十二篇。
日本英学史学会編 一九七六 英語事始。
(おとつり・けいこ) 倫理学 常磐学園短期大学助教授)